



# アジアリーグ アイスホッケーの可能性②

## ——スポーツのグローバル化

今回はアジアリーグアイスホッケー（以下アジアリーグ）ジャパンオフィスの池田貢氏に話をうかがい、チーム力の均等化、リーグの活性化を目指す同リーグの3シーズン目の取り組みを紹介した。今回は04-05シーズンを制したコクドの岩崎伸一監督、韓国のアニョンハルラに所属する瀬高哲雄選手に、監督・選手それぞれの視点からアジアリーグを語っていただいた。

### 監督からみたアジアリーグの課題

実力を加味して外国人選手枠を各チームごとに設定していること、同国チーム間でのグループゲームを導入するなど、3シーズン目を迎えたアジアリーグの新たな取り組みは前回で触れたとおりであるが、実際に選手・監督はどう捉えているのか。まず、04-05シーズンを制したコクドの岩崎監督に話を聞いた。

岩崎監督は、13年間コクドの選手として活躍し、昨年まで3年間コーチを務め、今シーズンより指揮をとっている。選手としてアジアリーグに出場した経験はないが、現役であった日本リーグと何が変わったのかを尋ねると、次のような答えが返ってきた。

「純粋に競技だけを考えると、とくに中国のチームとのレベルの差が開いているのが課題になると思います。日本のチームと対戦したほうが選手のレベルアップにもつながりますし、正直に言えば日本リーグ時代のほうが選手が成長しやすい環境にあったと思います」

海外のチーム力は確実に上がっており、アウェーの試合では競ったゲームになるという。04-05シーズンの中国遠征では、ベテランを休養させ、若手選手にチャンスを与える機会となっていたそうだが、今シーズ

ンはベテラン選手も起用して試合に臨んでいる。

しかし、05年12月21日現在、ハルピンが27試合で3勝、チチハルは26試合でいまだ未勝利であり、その差は歴然である（レギュラーシーズンは全38試合）。とくにアウェーではパフォーマンスの顕著な低下が見られ、11月3日に北海道・釧路で行われた日本製紙とチチハルの試合では24-0という結果が残っている。

リーグによってチーム力の均等化が図られているものの、真に均等化されるにはまだ時間がかかると言えそう。

とは言え、中国のチームとの試合でいい加減な試合をしてしまうと、翌週に上位のチームと対戦する際によいチーム状態を維持できないことも考えられる。思った以上にプレッシャーがないとルーズなプレーが出てきてしまい、それを翌週にも引きずってしまうからである。

これは日本のチームに与えられた新たな課題で、「中国の選手は技術はまだ劣るものの、身体が大きく体力もあります。これは韓国も同様で身体能力が高い。危機感を持ってレベルアップしていかなければいけないと感じています」と岩崎監督は言う。

### 選手からみたアジアリーグの可能性

瀬高選手は、日本人選手で唯一海外のチームに所属している。今シーズンより、日・韓・中の3カ国の選手は外国人選手枠とは別に他国のチームに所属できるようになったが、そのきっかけが瀬高選手のアニョンハルラ（韓国）への加入である。

瀬高選手は駒大苫小牧高校を卒業後、東洋大学に進学、04-05シーズンにコクドに所属していたが、在籍1年で戦力外となり、次の活動の場を選んだのがアニョンハルラだった。その経緯を次のように話す。

「コクドは04-05年のチャンピオンチームだったので、レベルの高い環境でプレーをしたいと考えていました。日本では、すぐれた学生選手でもアジアリーグのチームに加入するのはごくわずかです。そこで、上位チームであるアニョンハルラでプレーしたいと考えました」

アニョンハルラへの加入にはコクドからの働きかけもあり、さいわいにも契約選手となったが、給料は1カ月150万ウォン（約15万円）。決して楽な生活ではないと話す。オフシーズンにベルボーイとしての仕事もあったコクド在籍時とは異なりプロと同じ扱いである。「アイスホッケーだけに専念した充実した毎日を送っている」と瀬高選手。

開幕時に「とにかく目に見える結果を出したい」と考え、レギュラーシーズンで10ゴール10アシストを目標にしていたそうだが、25試合を消化して5ゴール4アシスト。目標の達成は厳しい状況だが、その理由は昨シーズンほとんど試合に出場していなかった経験不足に加え、ディフェンシブな役割を与えられてからである。実際に積極的にゴールを狙いにいったこともあったそうだが、その結果試合に出させてもらえなかった苦い経験を、今では試合に出て役割をこなすことを徹底している。瀬高選手は単年契約、アイスホッケーを続けるうえでも、まずはチームに必要とされる選手になることが求められている。

「もし韓国でプレーできなかつたらどうなっていたか、今考えると本当に怖いです。日本にはいい選手がたくさんいますので、中国、韓国のチームでプレーする日本人選手が後に出てくれるよう、がんばっていきたいと思います」

今のところ日本のチームに戻ることは考えておらず、1年でも長くアニャンハルラでプレーしたいと瀬高

選手は抱負を語った。

### 見えてきた課題・可能性からさらなる発展へ

岩崎監督、瀬高選手の話から、アジアリーグの課題と可能性が見えてきたが、まだ3年目ということもあり、改善すべき点が多いのが現状と言えそうだ。岩崎監督は、シーズンが始まるにあたり「コンディショニングにはより一層気を使ってほしい」と選手に伝えている。これは所属選手が33人から25人へ減ったためでもあるが、日本リーグと比較して移動時間が長く、過密日程であることを考慮したからである。

一方で、アジアリーグでは長距離の移動が日常的になっているため、海外の試合に対する精神的な強さが養われている。たとえば、中国・チチハルとのアウェーゲームでは、東京から新潟までバスで移動し飛行機でハルビンへ、そこからさらにバスで6時間ほどかけて試合会場に到着する。移動時間は片道約13時間。日本リーグのときは移動時間が短く、極端に異なる環境で試合をすることがなかったため、ナショナルチーム

の監督を務めたデーブ・キング氏は、カナダへ遠征に行ったときにわざわざバスで7、8時間かかるような場所でゲームを組み、試合をして早朝に帰ってくるという日程を組んだという。

この点を見れば、オリンピックでメダルを獲得できるチームをアジアから出すという同リーグの目標においてプラスとなるが、勝田紳嗣・コクドマネージャーの話(カココミ参照)からもわかるように、遠征時の宿泊数を減らしたり、移動手段を飛行機からバスにすることで経費を抑えているため、プレーする側からみればマイナスな面もある。

スポーツ界のグローバル化はどんどん進み、日本人選手が海外でプレーすることは決して珍しいことではなくなった。次の段階として、アイスホッケーのように国をまたいだリーグが他のスポーツでも設立されることが予測される。その先がけとしてスタートしているアジアリーグを2回にわたって取り上げたが、現在ある課題と可能性がさらなるスポーツの発展に寄与されることを期待したい。(長谷川智憲)

## ■チームスタッフからみたアジアリーグ

——勝田紳嗣・コクドマネージャーの話

アジアリーグになり海外で試合をするようになりましたが、それだけ宿泊数や移動手段にかかる経費は抑えています。バイキングスからの提案でストックホルムで試合をしてほしいという要望があったのですが、すべての日本のチームが経費と時間の問題で反対しています。なるべくホームの試合を多くして経費を削減したいというのが正直なところです。グルーリーグができたのは、これらの点をリーグが協議した結果でもあります。

新人選手の獲得についても、日本リーグで6チームあった頃は毎年2、3人の大学生と、高卒の選手を数人受け入れる受け皿はあったのですが、今シーズンの新入団選手はゼロで、来シーズンも1選手とるかたらないかです。人数についてはチームの意向によりますが、選手の獲得に慎重

になっているのは確かです。トライアウトを今後はやっという方向にはなっていますが、現在所属する選手も面接、筆記試験を経て入社した社員ですし、純粋に選手として受け入れるのは難しいのが現状です。

アジアリーグになって一番変わったと感じているのは、海外選手の売り込みが多くなったということです。私どものところにも売り込みがきますし、アジアリーグに選手の情報が寄せられた場合はすべてリリースされます。そういう意味では日本リーグのときよりもグローバルに注目されています。

現時点で日本のチームにメリットはそう多いとは言えませんが、国内の4チームだけで試合を続けるよりはよいですし、将来的にはメリットがあるのではないかと思います。